

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑳

部落差別の歴史「で」学ぶ

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

1998年、わたしは担任から同和教育の担当になりました。この人事は、わたしの教員としてのあり方に大きな変化をもたらしました。その最大の変化は、職場にとどまる時間でした。担任時代はクラスの子もたちと一緒にいることを最優先にしたので、出張はもちろんのこと、年休もとらずに、ひたすら教室にいました。しかし、同和教育担当になることで、学校の外に出る機会が増えました。その結果、さまざまな研修会に参加することができるようになりました。なかでも「部落史の見直し」についての研修は、わたしの部落に対する考え方を大きく変えました。

前号でも書いたように、担任時代は、賤民身分は江戸幕府によってつくられたと考えていました。それに対して、「部落史の見直し」が提示したのは、部落の起源は中世にまで遡れるということでした。このパラダイムの変換は、単に「起源がいつか」ということにとどまりませんでした。例えば、従来は貧しいとされていた被差別身分の人々も、個々の部落の歴史を調べる中で、実は必ずしもそうでなかったとされ、被差別身分の人々の多様なありようが示されました。さらに、従来は、差別・被差別の関係を「上下」ととらえていたのに対し、「忌避・排除」ととらえるようになりました。なかでも、わたしに大きな気づきを与えてくれたのは、ある講演の中で聞いた、部落の古老によるものとされる次の言葉でした。それは「もしも、きたなければ、金があれば、貧乏だから、此の下に総て差別的言辭が付随する」でした。

部落問題学習をすると、生徒たちは「なぜ部落差別があるのかわからない」と言います。わたしは、「だから言われなき差別なのだ」と返していましたが、これは説明したことにはなっていません。そんなわたしに、先の古老の言葉は答を与えてくれました。それは、「差別が先にあり、理由は後づけである」ということでした。つまり、差別の理由は部落にあるのではなく、部落に対する人々の「まなざし」と、それをつくりだす社会構造にあるということがわかったのです。

さらに、大阪の大正区にある関西沖縄文庫の金城きんじょう馨かおるさんの講演からもヒントをもらいました。それは、「現在、外国人に対してある差別は、かつて沖縄人に向けられていた差別と同じではないか」という問題提起でした。差別はその対象を変えながらも、基本的な構造は変わっていないということに気づいたのです。

わたしが現在おこなっている部落問題学習では、最初に「部落差別『で』学ぶ」とします。なぜなら、部落差別を題材として、差別を生み出す社会の構造を伝えたいと思うからです。その構造とは「排除」です。これをわたしは「あいつは違う、わたしたちは同じ」と説明します。ポイントは「同じわたしたち」というカテゴリーをつくるためには、必ず「違うあいつ」というカテゴリーが必要とされるということです。この「あいつ」を、人々はどのようにしてつくってきたのかを部落の歴史から学びます。まず、歴史を現在から遡ります。現在は文化や言葉を理由として在日外国人が排除される時代です。その少し前は在日コリアンが排除の最前線に立たされていました。その前は沖縄人、そしてその前はアイヌ、そして中世にまでさかのぼったところに「ケガレ」を理由として排除された人々、すなわち被差別民がいたとします。次に、歴史をたどりながら、被差別民に対するまわりの人々の「まなざし」の変化に着目します。それは「ケガレ」「豊かさ」「貧しさ」「不衛生」「妬み」とさまざまに変化します。しかし変化がないものがあります。それは、それらを理由とした、まわりの人々の「排除のまなざし」です。

わたしは生徒たちに「差別をなくすのは簡単」と言います。それは「排除せずに人と人がつながればよい」からです。一方「差別をなくすのは難しい」とも言います。なぜなら「排除なしに人と人がつながる方法を、わたしたちはまだ見つけていない」からです。そして、「その方法を一緒に探そう」と呼びかけます。

この学習の次の学期に、わたしの勤務校の特徴的なとりくみであるリビングライブラリをおこないます。次号ではそれについて書くことにします。